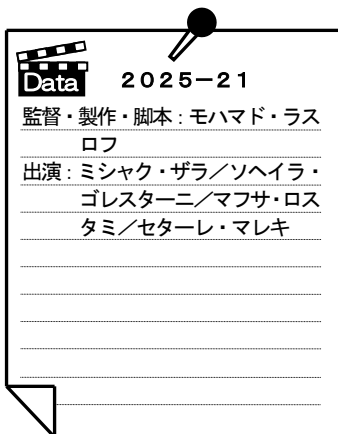




👁️👁️ みどころ

イスラム教を信奉している国、イランは北朝鮮と共に西欧民主主義諸国にとって“やっかいな国”。“ヒジャーブ”に象徴されるとおり、女性にはとりわけやっかいな国だ。しかし、そんな国でも市民の生活、家族の営みがあるのは当然。強権政権下で裁判所調査官に昇進できたことを喜ぶ、一家の主・イマンとその妻・ナジメだが、“護身用”に預かった銃が家の中から消えてしまうと・・・？

犯人は一体誰？反体制デモの学生たちへの共感を近時強めている長女？それとも次女？まさか三女が？イマンが家父長的権限を行使して妻子への“調査”を強化した挙句、一家に訪れるあっと驚く結末（＝悲劇）とは！？

家族の営みの中で描かれる、“大胆不敵で予測不能なストーリー”はとにかくすごい。こんな映画を検閲の厳しいイラン国内で撮影し、禁固 8 年等の有罪判決を受けてもなお、イランを脱出して世界公開に奔走したモハマド・ラスロフ監督に拍手！

ちなみに、『聖なるイチジクの種』というタイトルの意味は？そこに込めたモハマド・ラスロフ監督の思いもしっかり受け止めたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■イランで有罪判決！脱出の末、映画祭で栄冠！■□■

本作のチラシには、「映画製作で罪に問われたモハマド・ラスロフ監督。母国を脱し、命懸けで戦うその姿に世界が喝采！」の文字が躍っている。また、「カンヌをはじめ世界の映画賞席捲！アカデミー賞国際長編映画賞ドイツ代表選出！」とも書かれているが、本作はイラン人、モハマド・ラスロフ監督によるフランス・ドイツ・イラン映画だ。イラン映画と聞けば、『人生タクシー』（15 年）（『シネマ 40』78 頁）のジャファル・パナヒ監督がイラン当局の検閲と戦う映画監督として有名だが、モハマド・ラスロフ監督もベルリン国際

映画祭で金熊賞を受賞した『悪は存在せず』（20 年）で有名なイラン人の反体制派の映画監督だ。

平和憲法の下で表現の自由が保障されている日本では、イランの検閲制度の問題点に容易に目が向かないが、2024 年 4 月、「禁固 8 年、鞭打ち、罰金、財産没収の判決」を受けたモハマド・ラスロフ監督は、2024 年カンヌ国際映画祭コンペティション部門に『聖なるイチジクの種』が選出されたことを受けて、イラン当局から尋問を受け、出国を禁止されたそう。そこで彼が取った行動は、その直後に何人かのスタッフとイラン当局の訴追を避けるため、長く過酷な旅を経て、イランからヨーロッパに脱出したというから、なんと

■□■ラスロフ監督の声明に注目！これをどう読み解く？■□■

少し長くなるが、パンフレットに収録されている、そんなラスロフ監督の「2024 年 5 月 12 日付声明」をここに転載しておきたい。

声明／モハマド・ラスロフ（2024 年 5 月 12 日）

長く込み入った旅路を経て、数日前にヨーロッパに辿り着きました。一月ほど前、弁護士から控訴裁判所で禁固 8 年の刑が確定し、すぐにも執行されるだろうと知らされました。新しい映画のことが知られれば、刑期がさらに長くなるのは間違いありません。考える時間はあまりありませんでした。収監されるか、イランを脱出するか選ばなくてはなりません。私は重い気持ちで国外脱出を選びました。私は 2017 年 9 月、イラン・イスラム共和国にパスポートを没収されています。ですから、秘密裏にイランを出なくてはなりませんでした。

もちろん、国を出ることを余儀なくされた、私に対する不当な判決には強く抗議します。しかしながら、イランの司法制度はあまりにも過酷でおかしな判決を下すことが多いため、そこで刑期に不服を申し立てるのが得策だとは思えません。イランは抗議者や公民権活動家の命を狙い、死刑を執行しています。信じ難いことですが、私がこれを書いている今も、若いrapperのトゥーマジ・サレヒが死刑囚として収監されています。弾圧の範囲と激しさは残忍の域に達しており、非道な政府の犯罪が毎日報じられています。イランの犯罪装置は、絶え間なく組織的に人権を踏みみにじり続けているのです。

イランの諜報機関が私の映画製作について情報を得る前に、なんとかイランを脱出することができた俳優も多数います。けれども、今も俳優や映画のエージェントがたくさん残っていて、諜報機関から圧力がかかっています。長い取り調べを受けたり、家族が呼び出されて脅されたりした人もいます。この映画に出演したことで、彼らは起訴され、出国を禁じられました。カメラマンの事務所は強制捜査に遭い、機材はすべて押収されました。音響技師がカナダへ出国することも妨害されました。諜報機関

は映画クルーの取り調べの際、私にカンヌ国際映画祭からの撤退を促すよう要求しました。クルーに対し、映画のストーリーを認識しないまま私に操られてプロジェクトに参加させられた、と丸めこもうとしていたのです。

製作中、私と仲間や友人らにはたいへんな制約を受けました。それでもなお私は、イラン政府の検閲による介入を受けない、より現実に近いストーリーを目指しました。表現の自由の制限や抑圧は、たとえそれが創造性を刺激するものであったとしても正当化されるべきではありません。しかし、道がなければ作らなければなりません。

世界の映画コミュニティは、そのような映画の製作者への有効な支援を保障すべきです。言論の自由を守るため、はっきり大きな声をあげるべきです。検閲を支持するのではなく、臆さずに立ちむかう人々は、国際映画団体の支援によってその行動の重要性を再確認します。個人的な経験からいえば、そうした支援が彼らのきわめて重要な仕事を続ける上で、貴重な助けとなるのです。

この映画は、多くの人の助けを借りて製作したものです。私の思いは、彼らと共にあります。彼らの安全、安寧が心配です。

私はキリスト教についてはそれなりの知識を持っているが、アラーの神を尊ぶイスラム教の教えはサッパリわからない。したがって、イランの法律では、今なお今回モハマド・ラスロフ監督が受けたという「鞭打ちの刑」なるものが存在することにビックリ！そんな体制の下で、苛酷な有罪判決を受けながら本作を完成させたモハマド・ラスロフ監督に拍手！

■□■調査官に昇進！そりゃめでたい！同時に護身用の銃も！■□■

日本では、裁判官・検事・弁護士になるための基本ルートは司法試験だが、1979年に「イスラム革命」が起きたイランでは？本作冒頭、イランの首都テヘランで国家公務に従事する一家の主・イマン（ミシャク・ザラ）が、裁判所調査官に昇進するストーリーが描かれる。もっとも、ネット情報では、「予審判事」に昇進と書かれているから、パンフレットに書かれている「裁判所調査官」なる表現がどこまで正しいのかは、弁護士の私にもよくわからない。

この昇進は、イマンの国家公務員としての20年間にわたる勤勉さと愛国心を買われた結果だから、偉いものだ。しかし、彼が夢にまで見てやっとたどり着いた裁判所調査官の仕事は、反政府デモ逮捕者の起訴状を国の指示通りに捏造することだったから、アレレ、アレレ……。しかも、テヘランは今、市民による抗議デモで揺れていたから、事件数はうなぎ登りで、イマンも多忙を極めたうえ、裁判所調査官には身の危険も。そこで、イマンには護身用の銃が支給されることに。なるほど、なるほど……。

■□■父親と長女との対立は？その家庭内での広がり？■□■

イランという国の政治体制の中で努力し、それなりの成功を取めた立場ではあるものの、昇進した今、イマンはさまざまな矛盾に悩んでいた。もっとも、イマンは職場においては

イランの法体制と指揮命令系統に組み込まれ、何の発言力も持たない無力な存在だったが、妻ナジメ（ソヘイラ・グレスターニ）と長女レズワン（マフサ・ロスタミ）、次女サナ（セターレ・マレキ）、三女ガデリ（レザ・アクラギラッド）と共に暮らしていた彼は、家庭内では「家父長」として君臨していた。

イスラム教の下で女性がいかに束縛されているかは“ヒジャーブ”に象徴されている。また、近時のイラン映画の名作『白い牛のバラッド』（20年）（『シネマ 50』147 頁）や『聖地には蜘蛛が巣を張る』（22年）（『シネマ 53』187 頁）を観れば、その実態は明らかだ。しかし本作を観ていると、妻のナジメは「夫への服従は絶対」と考えていたのに対し、大学に通っている長女は学校内での反体制デモと身近に接していたから、その先頭に立って戦っている友人のサダフ（ニウシャ・アフシ）に好意的。そして、それに比例して（？）保守的で権力的な父親には反抗的だ。そんな長女レズワンの姿を身近に見ていると、次女のサナも次第に父親への反発を強め、長女の意見に同調していくことに。

母親のナジメは父親と娘との間に立って日々苦労を重ねていたが、ある日、警官隊の暴行によって目を負傷したサダフをレズワンが家に引き入れたのを知ると・・・？

■□■家庭内で銃が消えた！容疑者は父、母、姉、妹・・・？■□■

本作導入部は、調査官への昇進を喜ぶと同時に、護身用の銃を手渡されたことに戸惑うイマンとその妻ナジメの姿が描かれる。本気で護身用に使うのなら、夜はベッドの枕の下に、昼はスーツのポケット内に、となるはずだが、イマンもナジメも身に迫る危険など全く感じていないから、とりあえずタンスの引き出しの中に・・・？かどうかは知らないが、しまっておいたはずの銃がある日なくなっていることを知ったイマンとナジメが唖然とするところから、“衝撃の問題作”の本格的ストーリーが始まっていく。

今年の誕生日で 76 歳を迎えた私は認知症ではないものの、次第に物忘れがひどくなっていくのが悩みの種だが、イマンはまだまだ働き盛りだから、銃の紛失は自分の記憶違いのせいではないと確信していたらしい。そうすると、必然的に銃がなくなったのは、第 1 に妻のナジメが何らかの思惑でどこかに隠したため、第 2 に最近特に反政府デモへの肩入れが激しい長女のレズワンが何かヤバイことを考えて盗んだため、と考えたのは仕方ない。つまり、イマンは自分の記憶違いでなければ、家庭内で消えた銃の容疑者はナジメもしくはレズワンと考えたわけだが、問題はその後だ。

調査官としてのイマンは自白を強制するような取り調べに拒否反応を示したが、家庭内では家父長として絶対的な権力を持っていたから、妻や 3 人の娘たちからそれなりに調査（聴き取り）を進めていけば、“容疑者”の特定と銃を盗んだ（隠した）動機等も判明するはずだ。そんな思考経路の下で、イマンはまずナジメと徹底的に話し合ったが、結果は、アレレ、アレレ・・・？さらに、3 人の娘たちを集合させ、家父長的な権限（威厳）を示しながら順々に「犯人は名乗り出るように」と話し合いを重ねたが、結果はやはり同じだった。しかし、家の中に銃を隠したことを知っているのはナジメとレズワンの 2 人だけだ

から、この家の中に住んでいる家族以外に容疑者は考えられない。すると、一体誰がいつまでシラを切っているの？私たちは、お互いに心の底から信頼してる家族ではないの？

イマンの家族に対するそんな疑心暗鬼が急速に広がっていくのと正比例するかのように入作のスリリングさが加速していくから、それに注目！他方で、“政府のイヌ”のような形で調査官の仕事に邁進しているイマンに対する反政府勢力からの“攻撃らしきもの”が始まると、その不安や危険も加速していくのでそれにも注目！そんな事態になると、あの銃は現在のイマンにとって必要不可欠なものに。その結果、イマンは銃を渡してくれた信頼する上司に対して、銃を紛失したことを正直に告白・説明したが、イマンのミスの大きさは大変なものだ。上司はそれをハッキリ指摘しつつ、何ともう一つ持っていた銃を手渡してくれたからありがたい。こりゃ、何が何でも容疑者を見つけ出して、この上司に対して銃を2丁とも返還しなければ！その熱意を固めたイマンはある日、遂に妻子に対して、ある強硬手段に出ることに。

■□■ラストに見る娘たちの反抗（反乱？）は？銃の所在は？■□■

本作は167分の長尺だが、ラスト数十分間は、某所において、あくまで家父長としての権限を行使するイマンとそれに反抗（反乱？）する長女、次女、三女との間で本格化していく対決が描かれるので、それに注目！また、本作の導入部から前半にかけて一貫してイマンの理解者であり、3人の娘たちに対して、「父親を理解する努力をするように」と悟っていた妻のナジメが、次第にイマンへの疑問や疑惑を強め、娘たちの側に立っていく姿が印象深くかつ説得力を持って描かれるので、それにも注目！それにしても、イマンがあれだけ脅したりすかしたりしながら（？）、妻と娘たちを調べ上げたにもかかわらず、一向に所在が判明しなかった銃は一体どこにあったの？誰がどこに隠していたの？そして、その銃はいつ、どんなシークエンスの中でスクリーン上に登場してくるの？

某所においてイマンが妻や3人の娘たちに対して取った行動は、まさに家父長の権限を濫用したものと言わざるを得ない。とりわけ、長女を小屋の中に閉じ込めてしまうという行動は、いくら父親でも許されるものではないはずだ。ところが、本作ラストで見せる、それに対する娘たちの反抗（反乱？）は全く想定外のもので、一種の清涼感さえ覚えるから、それに注目！そんなイマンと娘たち、そして娘たちを支援する妻ナジメとの間の対立が激化していく結果、本作のクライマックスでは、イマンと娘たちがかなりハードな追いかっけっこを展開するし、長女が父親に対して銃口を向けるという事態にまで発展するから、すごい。すると、その結果は・・・？

それをここで書くことができないのは当然だ。本作のラスト数十分間に及ぶスリルとサスペンス、そしてその中で生まれる大興奮は、あなた自身の五感でしっかりと。

■□■タイトルの意味は？そこに込めた監督の思いは？■□■

“ある日、家庭内で1丁の銃が消えた―。”そんなストーリーを核とする、イラン人監督モハマド・ラスロフの問題提起作のタイトルは『聖なるイチジクの種』だが、本作はなぜ

そんなタイトルに？それが私にはサッパリわからなかったが、それは私がそもそもイチジクという植物（果物）を詳しく知らないうえ、イチジクの実もあまり食べたことがないことが原因かも・・・？

しかし、長年イランの南の島で暮らしてきたモハマド・ラスロフ監督はそうではないらしい。本作のパンフレットの「Director's Note」のラストの部分で、モハマド・ラスロフ監督は次のように書いている。

すなわち、

私は、長年イランの南の島で暮らしてきました。その島には、聖なるイチジクの古木があります。この木のライフサイクルに私は心を奪われました。種は島に運ばれ、他の木の枝に落ちます。そして芽を出し、大地に向かって根を伸ばします。根が地面に届くと、聖なるイチジクの木は自身の足で立ち、育ててもらった木を締め殺すのです。

さあ、あなたはこの監督の言葉をどう考える？そして、そんなタイトルの本作を監督し発表することに命を懸けたモハマド・ラスロフ監督の心情や行動をどう考える？

■□■パンフレットの3本のコラムは必読！■□■

イラン映画はもともと難解なものと思いがちだ。また、モハマド・ラスロフ監督がイラン政府から禁錮8年等の有罪判決を受けながら、国外脱出をしてまで発表したのが本作だと聞けば、余計、難解なものだと思ってしまう。

たしかに、本作はイランの司法制度やイランの家父長制度と“ヒジャーブ”に代表を象徴される女性差別の思想等を背景としているから、自由と平等、そして圧倒的なマスコミの力の下で、自由な政府批判が許されている日本では、分かりにくい点が多いのは間違いない。しかし、本作はそんな難解なテーマをクソ難しく表現するものではなく、「映画はエンタメ」という本質をおさえた脚本が書かれた上、巧妙な演出がなされているので、十分にそのスリルとサスペンスを楽しむことができる作品に仕上がっている。

したがって、格別の勉強をしなくても本作のストーリーを理解し、家庭内で起きた一丁の銃をめぐる家父長のイマンと妻+3人の娘たちとの“確執”を十分に楽しむことができる。しかし、その理解をより深めるためには、パンフレットにあるモハマド・ラスロフ監督の「Director's Note」や「声明」の他、次の3本のコラムをしっかり読み込みたい。

- ① 山崎和美氏（横浜市立大学国際教養学部・都市社会文化研究科准教授）の「家父長制とイラン女性の装い」
- ② 児玉美月氏（批評家）の「奪われた“力”を取り戻すとき」
- ③ 矢田部吉彦氏（前東京国際映画祭ディレクター／映画上映プロデューサー）の「カンヌを揺らした、命を賭した1本」

2025（令和7）年3月6日記